

AIが身近に存在する現代において、科学技術とうまくつき合いながら生きるために、AIと人間の特徴の差異に注目して考えてみたい。

「人間」を生物学的に定義することは難しくはない。しかし、そういった機械的な違いではなく、私たちが「人間らしさ」をどのようなところに感じるのかということ考えたとき、その答えを出すのは容易ではない。その上で「人間」を「人間」たらしめているのは何かといえれば、私は「誤りを犯す」ことだと考える。

「人間らしさ」というと、一般的には「感情」や「理性」といった心理的な動きがその根拠になることが多い。しかし、すでに示されているとおり、人間の心の動きに類似した挙動をAIで再現することは技術的には可能となりつつある。また、感情のメカニズムに関しても説明が進み、外部の刺激に反応して作用する神経伝達物質のコントロールも可能になっている。そう考えると、単に「感情の動きをもっている」だけでは、人間を人間として他者から区別する要因になるとはいえないだろう。

それに対して、「誤る」ことはどうだろうか。生物の行動を支配する機能として、生得的に機能する「本能」がある。さまざまな生物は本能に従って行動し、捕食し、繁殖する。その際には、基本的にはいつも同じ行動をとるし、誤った行動をとれば生存できない。また、AIにおいては、特定のインプットに対する最適解としてのアウトプットは一定である。しかし、人間が本能を超えて社会活動を行う際には、同じ個人であっても判断が変わることもあるし、必ず正しい判断をするわけでもない。「誤る」ことがあったからこそ、時には別の判断を下すからこそ、「人間」は多様な状況に適応し、生き残り、社会を発展させることができたといえる。「誤る」ことは、人間の多様性を支える重要な要素だといえるだろう。

もちろん、「誤る」だけではいけない。誤ったあとに、それに対して適切に対処することが重要だ。その対処の仕方も含めて多様な判断の幅をもち、時に誤った判断をするところに、「人間」の固有性があるのではないか。

人間が状況によって判断を変えたり、「誤る」（時には恣意的に結果をゆがめたりもする）ことは、ある意味合理的ではない。しかし、そういったゆらぎがなけ

れば新たな気づきは得られないし、状況に応じて臨機応変に対応することはできな
いだろう。……